

付篇1

吉田遺跡埋没河川出土の木製品

横山 成己

1. はじめに

吉田遺跡内に立地する吉田構内の地下には、東方から南方を囲む山地を起源とする水流痕跡が、丘陵部では埋没谷として、古期沖積面では埋没河川として複数遺存している。いずれも山口盆地を北東－南西に走る榎野川の支流として存在したものであろうが、発掘調査によって検出されたそれらについて、堆積土中に含まれる遺物により機能した時期が推定できるものは、縄文時代河川(河村1988、豆谷1994ほか)、弥生時代河川(横山2018ほか)、古墳時代河川(田畑2010ほか)、古代埋没谷(横山2019ほか)などと呼称して識別しているものの、各々の同一性などについては未だ不明確な点が多い。

本稿で紹介するのは、平成24年度に実施した図書館改修工事及び環境整備(図書館周辺道路迂回)工事に伴う本発掘調査(以下「図書館3号館調査(区)」と称する)にて検出された河川跡から出土した木製品であり、調査概要はすでに報告を行っている(横山2016)。

調査では、調査区のほぼ全域で西流する河川跡を検出しており、埋土からは多量の土器類とともに、右岸部付近を中心に複数の木製品が出土した。これらの木製品については、出土直後から水漬け保管を行ってきたが、平成29年度から令和元年度までの3年間で、(株)吉田生物研究所に委託し、保存処理と樹種同定を実施した。樹種同定の詳細は、本書付篇2に所収している。

2. 調査区の位置と環境(図43、写真94・95)

調査は吉田構内総合図書館の増築(3号館建設)に伴い、総合図書館北東空閑地、約170㎡を対象に、平成24(2012)年9月20日から同年11月14日にかけて実施された。同地は、姫山から南南西に派生する丘陵の周縁部に位置しており、現状では北に隣接して西流する用水路が設けられている。その北方は居住に適した洪積台地で、既往の調査により弥生時代から江戸時代まで連綿と集落が営み続けられていたことが判明しており、さらには昭和41(1966)年に始まる本学統合移転前の坂本集落にまで繋がっている。現在では事務局棟や学生会館、学生食堂などが建ち並んでいるが、遺構が密に埋存している状況を考慮し、本学により空間の一部が遺跡保存地区に指定され、公園として活用されている。

用水路より南に広がる古期沖積面には、学部棟等が密集している。その大半は正式な埋蔵文化財調査を経ずして建設されているものの、前述したように、当館設立以降に実施した発掘調査により、埋没河川が複数確認されており、遺物の包含状況から各河川が機能していた時期を推定することが可能となっている。

総合図書館敷地については、1号館が調査未実施で建築されたものの、2号館増築時には発掘調査が行われている。調査の結果、ピット群と土坑5基、溝7条のほか、調査区のほぼ中央を南東から北西に走る河川跡が確認されている(河村1985)が、各遺構と河川埋土からはいずれも弥生時代から鎌倉時代の遺物が出土していること、調査区東部の遺構検出面が地山とは考えられないことなどから、筆者は検出された河川以東は遺構基盤層を含め河川埋土と考えている(横山2016)。

図書館3号館は、その2号館の東隣に計画されたことから、予備発掘調査を経ずして本発掘調査を実施する運びとなった。なお、調査の後年であるが、総合図書館南側に設けられていた中央広場で実施した福利厚生施設(山口大学生生活協同組合FAVO)新営に伴う発掘調査において、4棟の竪穴式住居跡



写真94 山口大学吉田構内全景(南上空から)



写真95 遺跡保存地区(北西から)



図43 調査区周辺で確認された河川跡と各時代の推定集落域

からなる古墳時代中期中頃の集落跡を確認した(横山・水久保2022)。古期沖積面でも微高地であったと考えられ、短期間ではあるが集落が形成されていたことが明らかとなった。

3. 検出された河川跡(図44～46、写真96～104)

調査区の北端部を共同溝の埋設により、西端部を2号館建設および非常用階段の設置により深く攪乱を受けていたが、ほぼ全域が河川跡であることが確認された。調査区の北西端部と南東端部にて河川の肩部を検出しており、その幅は約15mを測る。深さは最深部で約1.3mである。河底に明確な傾斜は見られないが、地形からみて東北東から西南西に流れる河川であろう。

河川跡の埋積状況は極めて複雑であるが、上部の黒色系シルト層と下部の灰～褐色系砂礫層に大別される。河底直上の堆積土は水流痕跡を明確に示しており、包含される遺物は弥生時代のものが多数を占めるものの、古墳時代から鎌倉時代の遺物も一定数認められた(図44)。

土層断面からは、急な出水や増水で河底が攪乱や削平を受け、再堆積を繰り返していることが観察される。層位的な遺物の取りあげを厳密に行うことは困難な状況ではあったが、各所各層から出土した土器と、層序が比較的明瞭な南北アゼ東面(図46上)の状況を参考にすると、おそらく調査区内では古墳時代中に河底の埋積が始まり、以降の河川状況の変化は不明であるが、鎌倉時代に河川幅を狭めながら流路を移動させ、最終的には河川の右岸、左岸両側に2条の流路が形成され、鎌倉時代中に埋没を終えたと推定される。なお、現状では当調査区の南東端部で検出された河川の左岸部が、2号館調査区河川跡の南西肩部(左岸)に繋がると推測している。

また河底においては、調査区の南西端部付近で環状杭列2基を検出している。杭列1は10本の杭からなり、平面楕円形を呈し長軸径は内法で93cmを測るが、南東部が開口している。杭列2は1に比べ小ぶりで9本の杭からなり、やはり平面楕円形を呈しており、内法は長軸径は45cm、短軸径は35cmを測る。杭は全周するが東部の間隔が疎らである。構造から魷(エリ)などの定置式漁撈施設が推測される^{註1}が、断定できない。2号館調査区河川跡の河底で検出された2条の杭列(A・B列)との関係も想像されるものの、上述した河川の関係が正しければ、両者間の河川跡は図書館1・2号館の建設によりすでに破壊されていることから、確認する術を持たない。

4. 河川跡出土の木製品(図47～49、写真105、表6)

木製品は、自然木とともに調査区の北端中央部、中央部、南東部、南西部を中心に出土したが(写真105)、後3地点では木質の遺存状態が悪く、取り上げが行えたのは少数であった。ここでは取り上げが可能であった17点の実測図を再掲しておく。遺物番号は混乱を防ぐため概要報告(横山2016)から変更せず、そのまま用いている。

遺物観察表には、本書付篇2に所収している樹種同定の結果を付加している(表6)。木製品465については、樹種が空欄となっている。これは平成24(2012)年に出土した後、平成29(2017)年まで水漬け保管している間に、資料状態の確認不足が原因で劣化させてしまった結果である。本稿にてお詫び申し上げるとともに、今後は管理を適正に行えるよう努めたい。

樹種同定を行ったところ、資料16点のうち3点は同一個体であり、針葉樹は1点(ヒノキ科1)、広葉樹は13点(クスノキ科1、ブナ科10、ツバキ科1、マメ科1)との結果であった。



写真 96 河川埋土最上層検出状況（南東から）



写真 97 河川埋土完掘状況（南東から）

吉田遺跡埋没河川出土の木製品

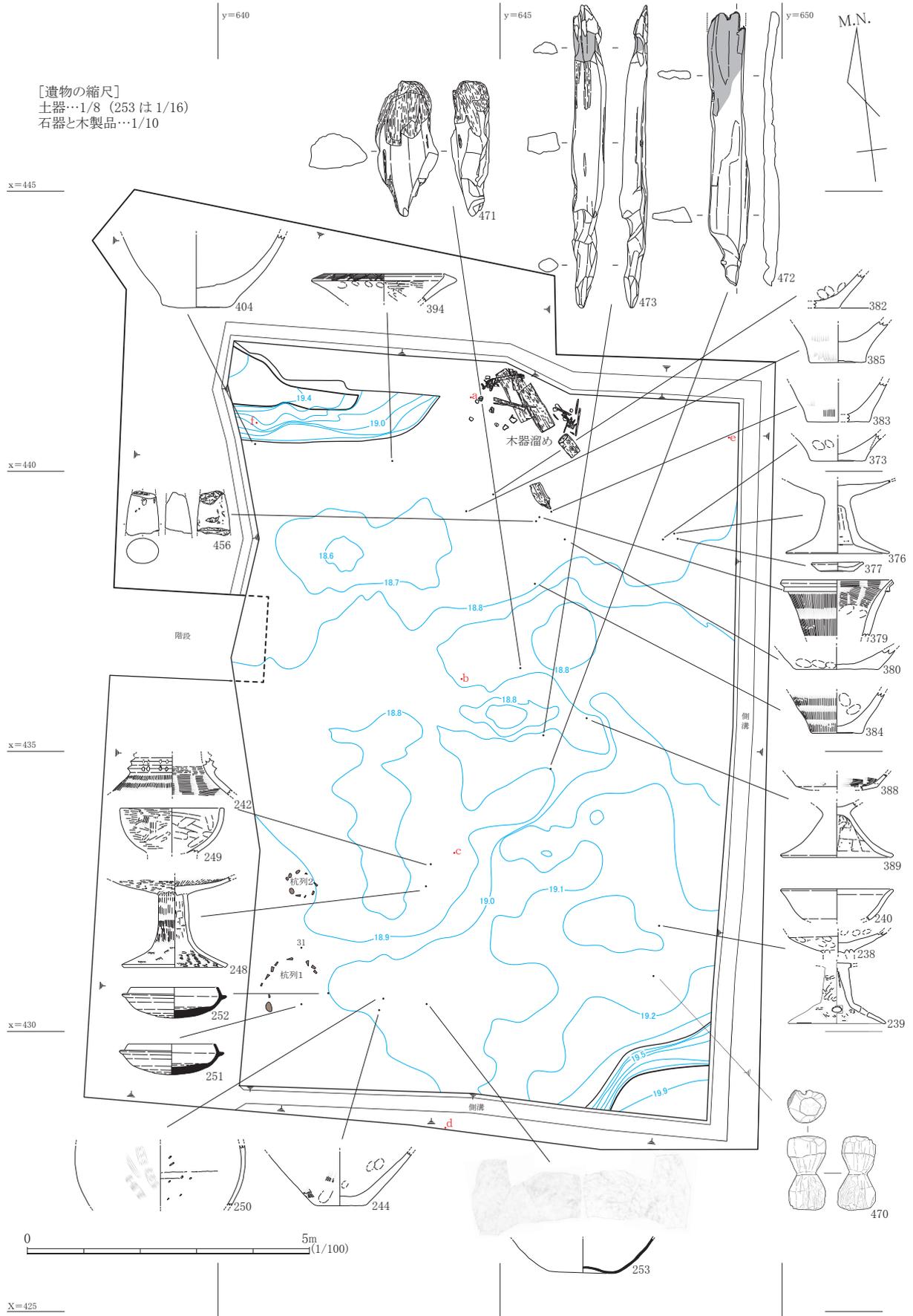


図 44 調査区平面図と河底付近の遺物出土地点

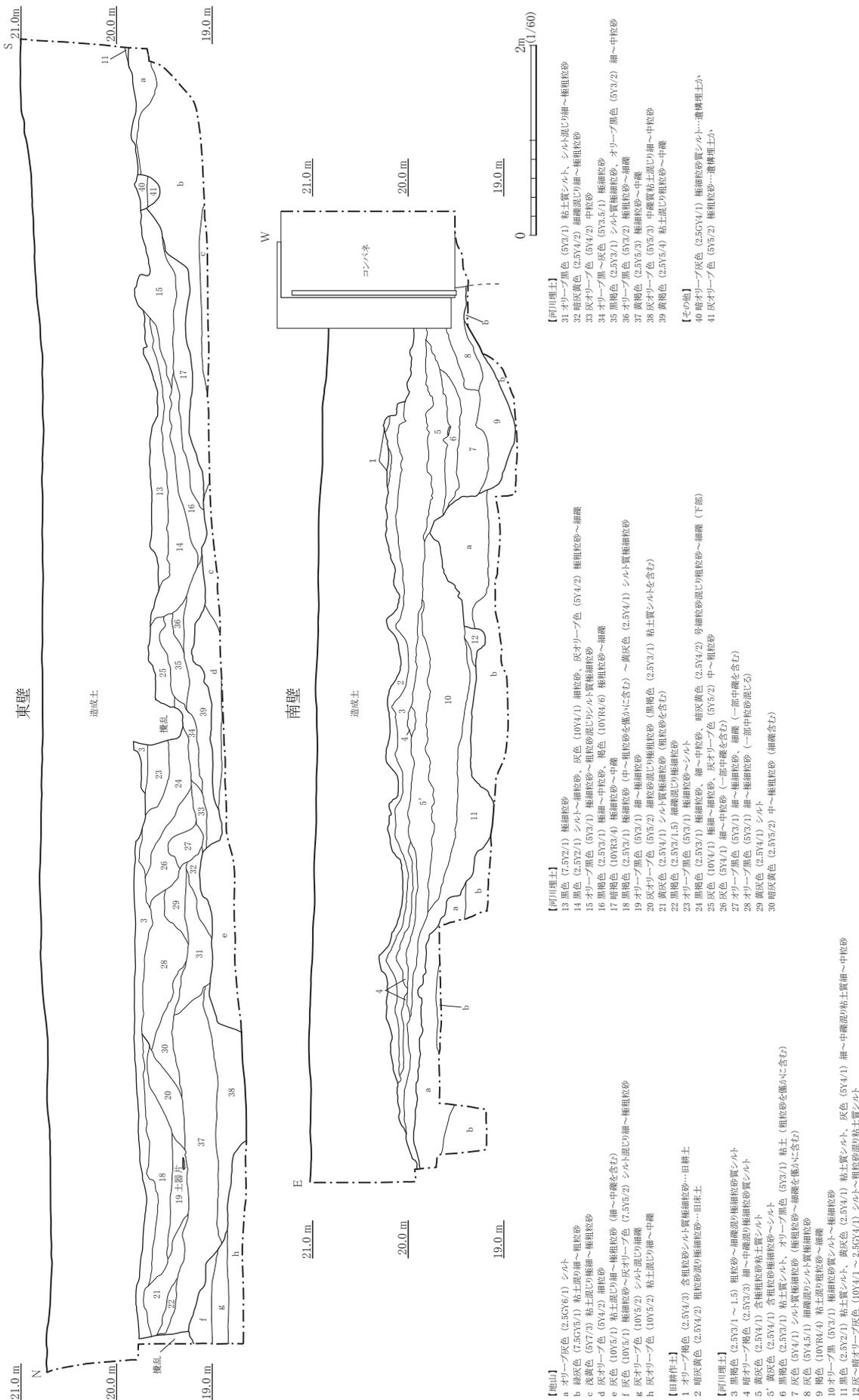


図 45 調査区東壁・南壁土層断面図

【地山】

- a. カリアーブ灰色 (2.5G5/6/1) シルト
- b. 緑灰色 (7.5G5/5/1) 粘土質シルト、シルト混じり層～粗粒砂
- c. 黄灰色 (5.5/7/3) 粘土質シルト～粗粒砂
- d. 灰カーブ灰色 (5.5/4/2) 細砂
- e. 灰色 (10.5/1/1) 粘土混じり層～粗粒砂 (骨～中骨を含む)
- f. 灰色 (10.5/1/1) 粘土質シルト、シルト混じり層～粗粒砂
- g. 灰カーブ灰色 (10.5/2/2) シルト混じり層
- h. 灰カーブ灰色 (10.5/2/2) 粘土混じり層～中骨

【旧耕作土】

- 1. カリアーブ灰色 (2.5G4/2) 含粗粒シルト質細粒砂～旧耕土
- 2. 暗灰黄色 (2.5G4/2) 粗粒砂混じり層～旧耕土

【河川堆土】

- 3. 暗褐色 (2.5/3/1) 粗粒砂～細砂混じり層～粗粒砂質シルト
- 4. 暗カーブ灰色 (2.5/3/2) 骨～中骨混じり層～粗粒砂質シルト
- 5. 暗灰色 (2.5/4/1) 含粗粒砂粘土質シルト
- 6. 暗灰色 (2.5/4/1) 含粗粒砂粘土質シルト
- 7. 暗褐色 (2.5/3/1) シルト混じり層～粗粒砂 (骨～中骨を含む)
- 8. 灰色 (5.5/4/1) シルト質細粒砂 (粗粒砂を僅かに含む)
- 9. 褐色 (5.5/3/1) 細砂混じり層～粗粒砂
- 10. 灰色 (10.5/4/1) 粗粒砂質シルト～粗粒砂
- 11. 黒色 (2.3/2/1) 粘土質シルト、黄灰色 (2.3/4/1) 粘土質シルト、灰色 (5.5/4/1) 骨～中骨混じり層～粗粒砂
- 12. 灰～暗カーブ灰色 (10.5/4/1) シルト～粗粒砂混じり層～粗粒砂

【河川堆土】

- 13. 黄灰色 (4.5/2/1) 細粒砂
- 14. 黄灰色 (4.5/2/1) シルト～細粒砂、灰色 (10.5/4/1) 細粒砂、灰カーブ灰色 (5.5/4/2) 粗粒砂～細砂
- 15. カリアーブ灰色 (2.5/3/1) 粗粒砂混じり層～粗粒砂
- 16. 暗褐色 (2.5/3/1) 粗粒砂～中粒砂、褐色 (10.5/4/6) 粗粒砂～細砂
- 17. 暗褐色 (10.5/3/4) 粗粒砂～中骨
- 18. 暗褐色 (10.5/3/4) 粗粒砂 (中～粗粒砂を僅かに含む) ～黄灰色 (2.5/4/1) シルト質細粒砂
- 19. 暗褐色 (2.5/3/1) 粗粒砂混じり層～粗粒砂
- 20. 灰カーブ灰色 (5.5/2/2) 粗粒砂混じり層～粗粒砂 (骨～中骨を含む)
- 21. 灰褐色 (2.5/4/1.5) シルト質細粒砂 (粗粒砂を含む)
- 22. 暗褐色 (2.5/3/1.5) 粗粒砂混じり層～粗粒砂
- 23. 暗褐色 (5.5/3/1) 粗粒砂混じり層～粗粒砂
- 24. 黒褐色 (2.3/3/1) 粗粒砂、細粒砂、中粒砂、暗灰黄色 (2.5/4/2) 骨～粗粒砂混じり層～細砂 (下部)
- 25. 灰色 (10.5/4/1) 粗粒砂～細粒砂、灰褐色 (10.5/2/2) 骨～粗粒砂
- 26. 灰色 (5.5/4/1) 骨～中粒砂 (一部中骨を含む)
- 27. カリアーブ灰色 (5.5/1/1) 骨～粗粒砂、細砂 (一部中骨を含む)
- 28. カリアーブ灰色 (5.5/1/1) 骨～粗粒砂 (一部中骨を含む)
- 29. 黄灰色 (2.5/4/1) シルト
- 30. 暗灰黄色 (2.5/5/2) 骨～粗粒砂 (細砂を含む)

【その他】

- 40. 暗カーブ灰色 (2.5G4/1) 粗粒砂質シルト～遺構埋土
- 41. 灰カーブ灰色 (5.5/2) 粗粒砂～遺構埋土

【河川堆土】

- 31. カリアーブ灰色 (5.5/1/1) 粘土質シルト、シルト混じり層～粗粒砂
- 32. 暗灰黄色 (2.5/4/2) 粗粒砂混じり層～粗粒砂
- 33. 灰カーブ灰色 (5.5/4/2) 中粒砂
- 34. カリアーブ灰色 (5.5/4/1) シルト質細粒砂
- 35. 暗褐色 (2.5/3/1) シルト質細粒砂
- 36. 暗褐色 (2.5/3/1) シルト質細粒砂
- 37. 暗褐色 (2.5/3/1) 粗粒砂～中骨
- 38. 灰カーブ灰色 (5.5/3/2) 骨～中粒砂
- 39. 黄褐色 (2.5/5/4) 粘土混じり層～中骨

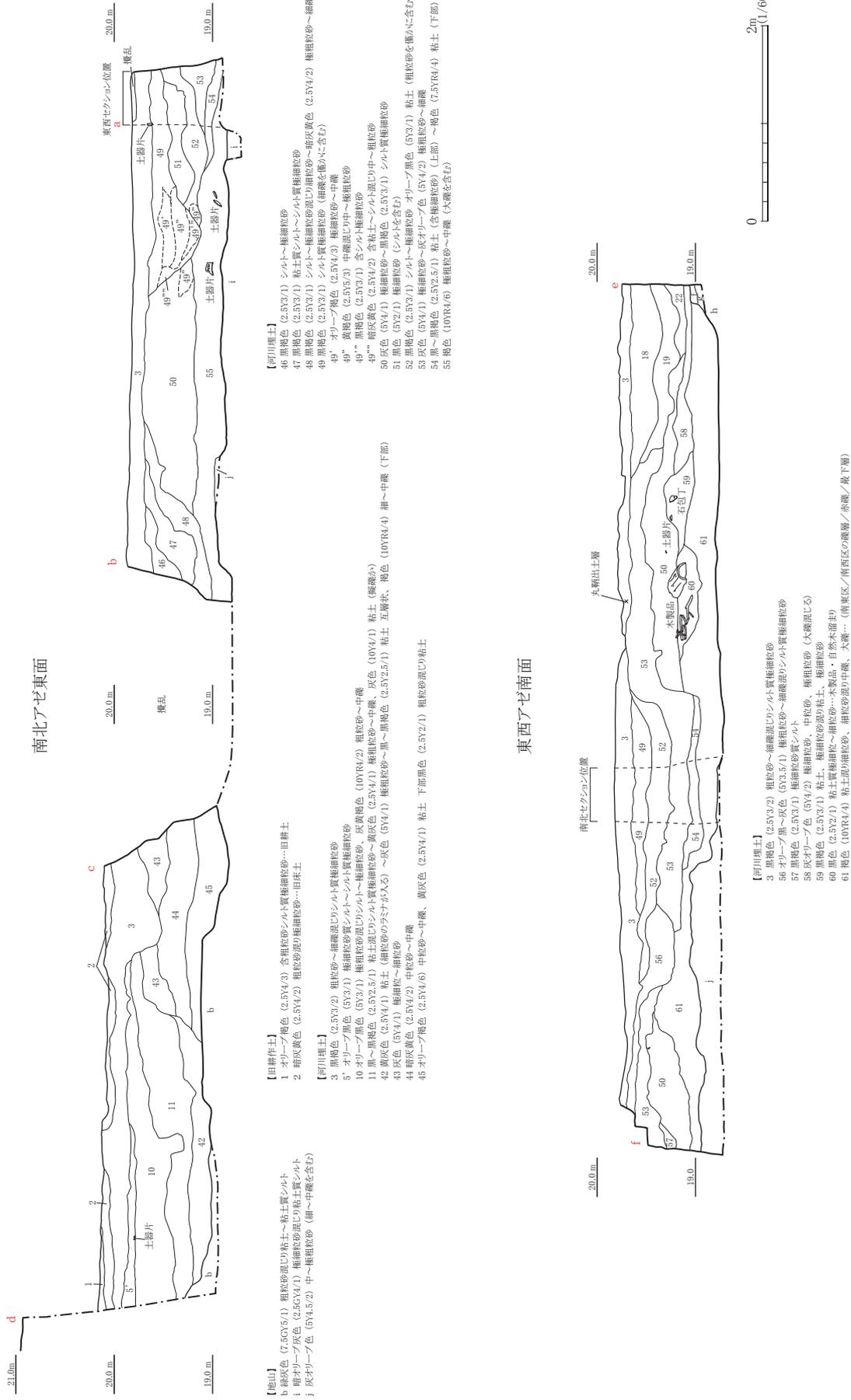


図 46 調査区アゼ土層断面図



写真 98 調査区東壁土層断面（北西から）



写真 99 調査区南壁土層断面（北から）



写真 100 東西アゼ西側南面土層断面（南から）



写真 101 東西アゼ東側南面土層断面（南から）



写真 102 南北アゼ北側東面土層断面（東から）



写真 103 南北アゼ南側東面土層断面（東から）



写真 104 東西アゼ西側北面土層断面（北から）



写真 105 河底遺物出土状況（南から）

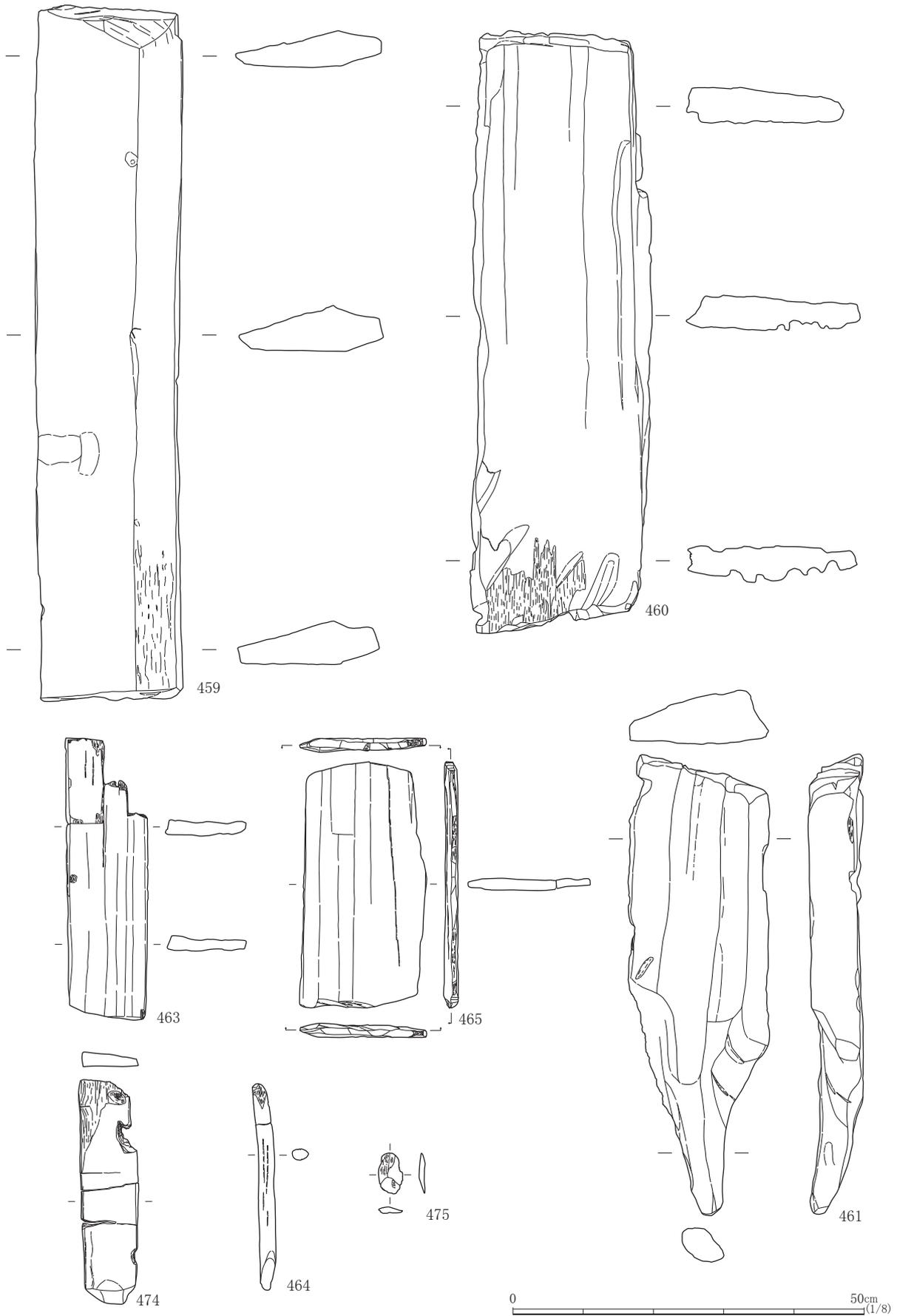


図 47 木器溜め出土木製品実測図①

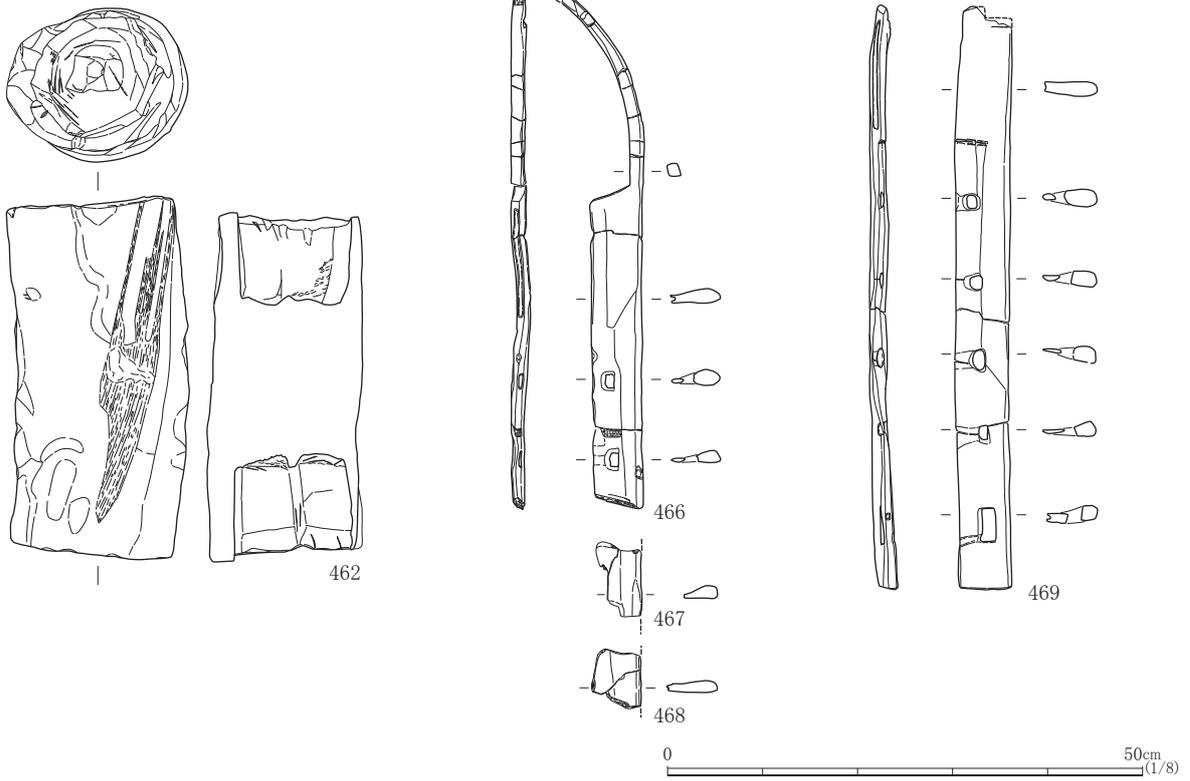


図 48 木器溜め出土木製品実測図②

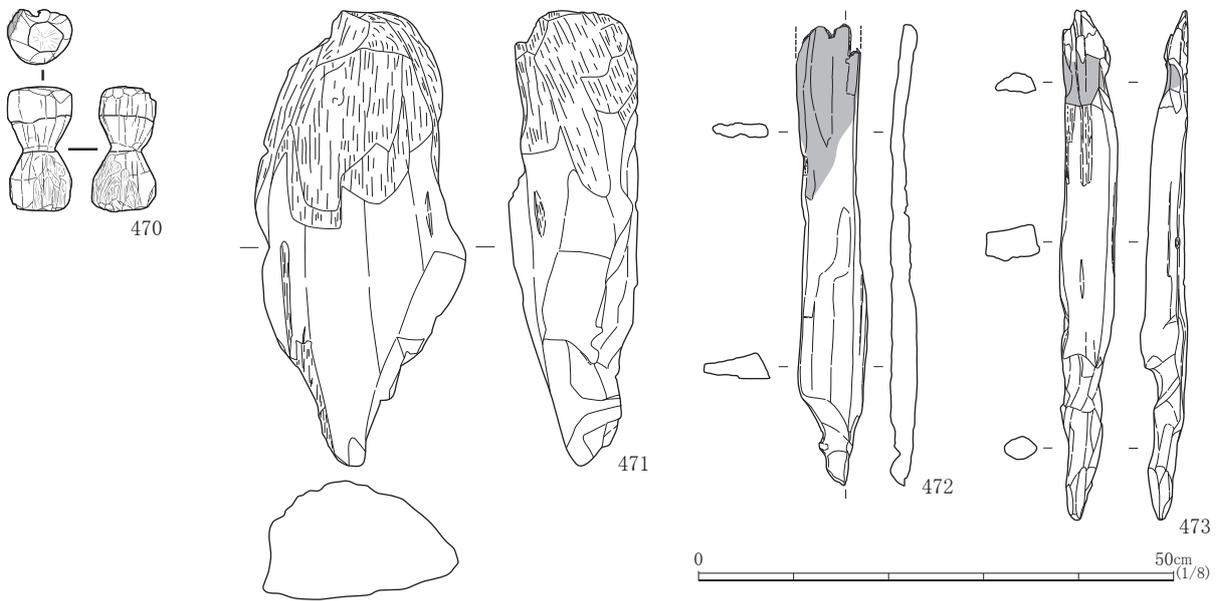


図 49 その他の木製品実測図

表6 河川跡出土木製品観察表

法量()は復元値

遺物 番号	層位	器種	法量(cm)			樹種	備考
			①長さ	②最大幅	③最大厚		
459	60層～61層上面	板材	①(99.55)	②20.95	③6.6	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
460	60層～61層上面	板材	①(86.2)	②25.5	③5.2	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
463	60層～61層上面	板材	①(40.6)	②11.6	③2.1	ヒノキ科ヒノキ属	
465	60層～61層上面	板材	①(35.5)	②17.4	③1.7		保管中に劣化
474	60層～61層上面	板材	①(32.1)	②8.2	③2.1	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
461	60層～61層上面	板材	①(66.0)	②20.0	③7.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
464	60層～61層上面	棒材	①(29.5)	②2.4	③1.7	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	棒状 両端部に加工痕
475	60層～61層上面	端材	①(5.85)	②3.4	③0.8	マメ科ネムノキ属	表面に2方向に削り痕あり
462	60層～61層上面	不明(刳物)	①(37.8)	②18.1	③15.8	クスノキ科クスノキ属クスノキ	両切断面に刳り込み
466	60層～61層上面	不明	①(54.6)	②5.5	③1.5	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	469と同種の製品 孔を2箇所 に施し、一側面に溝・窪みを有する
467	60層～61層上面	不明	①(8.0)	②4.7	③1.4	〃	466・468と同一個体
468	60層～61層上面	不明	①(6.4)	②5.2	③1.35	〃	466・467と同一個体
469	60層～61層上面	不明	①(61.7)	②5.9	③1.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	板状製品で5ヶ所に孔を施し、 一側面に溝・凹みを有する
470	17層	木錘	①13.1	②6.8	③6.9	ツバキ科ツバキ属	くびれ部最大幅3.3cm
471	55層	板材	①(24.1)	②10.7	③6.8	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	粗加工
472	55層	矢板・杭	①(49.1)	②7.0	③2.8	ブナ科クリ属クリ	上部が炭化
473	55層	矢板・杭	①(54.3)	②5.8	③3.4	ブナ科クリ属クリ	上部が炭化

5. 河川右岸に設けられた木器溜め遺構について(図46・50、写真101・106・107)

現地調査においては、調査区北壁の下に東西方向に共同溝が埋設されていたことから、調査区壁のやや南側に土層観察用の東西アゼを設けて河川埋土の掘削を行った。アゼ南側の掘り下げに先立ち、アゼ北側から共同溝埋設土の間に設けたサブトレンチを掘り下げ、下位の堆積層を確認しながら掘削を進めたが、埋土最上面から約60cm下方で木製品が多数確認された(写真106)。

アゼ南側の埋土掘削が木製品上面付近に及んだ際に、平面的な遺構の検出に努めたが、下位の堆積層が脆弱な砂礫層であったこともあり、明確な遺構として捉えることはできなかった。河川完掘後にアゼ断面を精査したところ、河川最下層の褐色粘土混じり砂礫層(61層)を切り込んで黒色粘土質砂層(60層)が堆積している(図46、写真101)ことが確認されたことから、河川の右岸直下に設けられた木器溜め遺構である可能性が高いことが判明した。

アゼ撤去後に出土状況図を作成した(図50)。木製品は大別すると4地点から出土している。これを加工木が集中するA地点、自然木と端材が集まるB地点、刳り込みのある丸太材が出土したC地点、やや南に離れたD地点と仮称すると、A地点では、北西部に自然木が溜まるが板材(459・160・463・465・474)がほぼ水平な状態で重なっている状況で、板材はすべて長軸を北西-南東方向に向けていた。また、板材の上には、孔や片側部に溝が穿たれ、孔の周囲に使用痕が残る用途不明の板状製品が2点(466～468・469)、東西方向にハ字状に置かれた状態で出土した。B地点では、切断面のある端材1点(475)以外は自然木の枝であったが、軸を北西-南東に向けるものと北東-南西に向けるものが混在する状況であった。前者は南東部が下に傾いており、後者は水平な状態であった。C地点では、両切断面に刳り込みのある丸太材1点(462)が軸を北西-南東に向け、南東部を下に傾けた状態で出土した。D地点は、片端部の平面形態を二等辺三角形形状に尖らせた板材(461)が、やはり長軸を北西-南東方向に向けているが、北西部を下に傾けた状態であった(写真107)。

状況的にみて、A地点が木器溜めの原位置を保ったもので、B地点は人為的な集積でなく自然堆積、C・D地点は元来A地点にあったものが自然作用等により河底深部にずり落ちたと推定されるが、C・D

表7 木製品の樹種（全体）

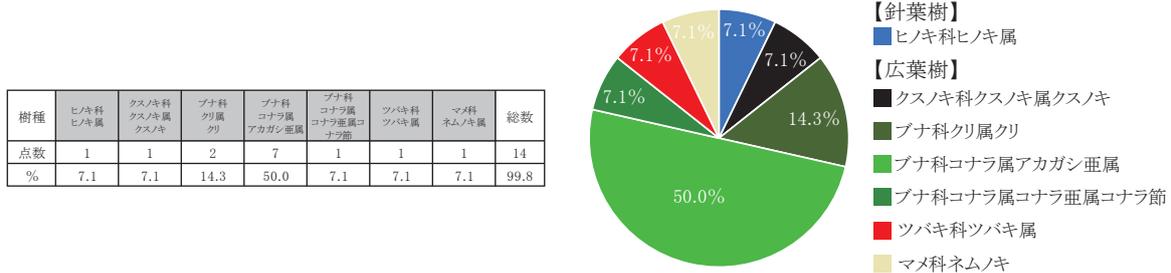
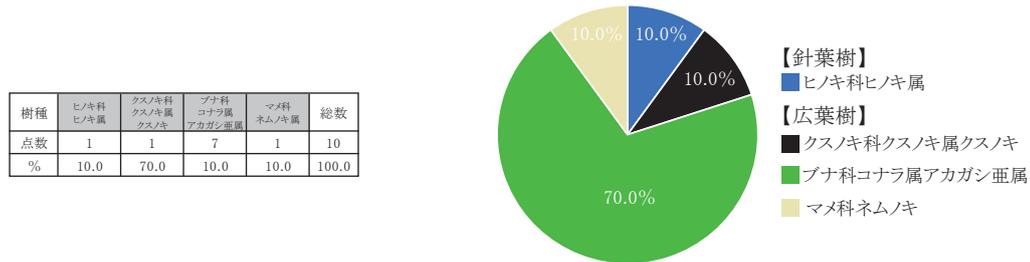


表8 木製品の樹種（木器溜め遺構）



地点の**461**と**462**が粗加工段階の未成品であるのに対し、A地点の**459・460・463・465・474**が材木状態であることには注意が必要であろう。

また、A地点の板材上部に置かれていた用途不明板状製品2点（**466～468・469**）は、孔横の紐擦れなど使用痕が明瞭に残る製品である。**466～468**の板状部片端には、湾曲して途中で切損する棒状部が延びており、**469**の板状部片端にも棒状部が折損した痕跡が残ることから、元来は2枚の板状部がU字形の棒状部により繋がっていた可能性が指摘できる。製品が木器溜めより出土する理由の一つとしては、再加工が考えられる。あるいは曲木のための水漬けであったのかも知れない。類似形態の木製品を他に求めたが、未だ管見に入っていない。

木器溜め遺構の時期については、下位に堆積する河川埋土最下層（61層）から鎌倉時代の土師器が出土していることから、河川が機能した末期に設けられたことが分かる。

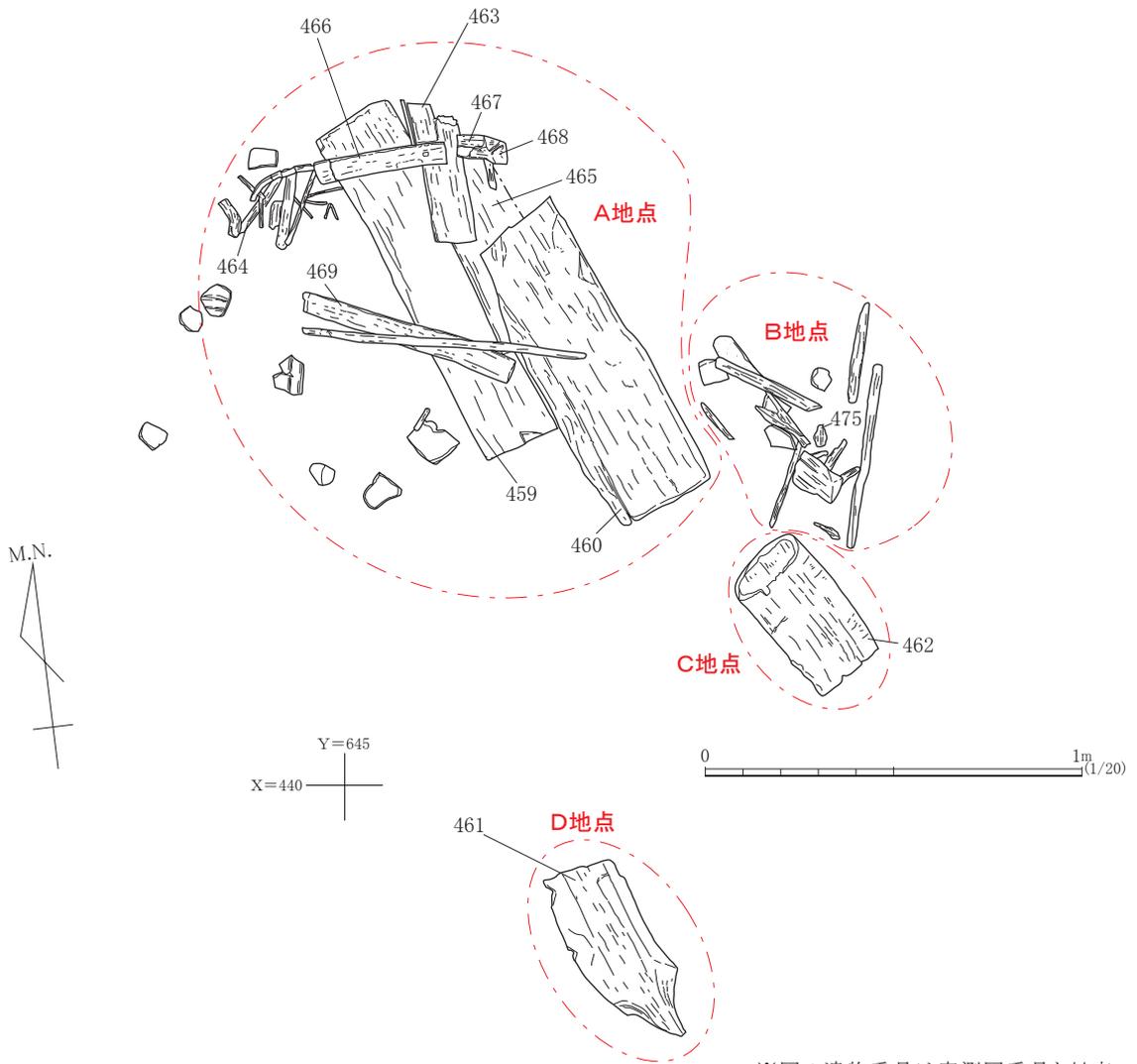
6. 木製品の樹種について（表7・8）

前述したが、河川跡からの出土で取り上げが可能であった木製品は17点（うち同一個体3点）であり、樹種同定を行った結果、針葉樹としてヒノキ科ヒノキ属1点、広葉樹としてクスノキ科クスノキ属クスノキ1点、ブナ科クリ属クリ2点、ブナ科コナラ属アカガシ亜属7点、ブナ科コナラ属コナラ節1点、ツバキ科ツバキ属1点、マメ科1ネムノキ属1点が存在することが明らかとなった（表7）。

このうち、調査区南西部から出土したほぼ完形の木錘（**470**）はツバキ科ツバキ属であった^{註4}。調査区中央部から出土した不整形な板材（**471**）はブナ科コナラ属コナラ節、その近辺から出土した上部が炭化する杭・矢板2点（**472・473**）はいずれもブナ科クリ属クリであった^{註5}。

木器溜め遺構に関わる木製品については、板材は1点（**463**）がヒノキ科ヒノキ属であったが、ほかは全てブナ科コナラ属アカガシ亜属であり、板材上部に置かれた不明板状製品（**466～468・469**）もブナ科コナラ属アカガシ亜属であった。両端に削り込みのある丸太材1点（**462**）はクスノキ科クスノキ属クスノキ、自然木に混じり出土した端材（**475**）はマメ科ネムノキであった。この結果から、木器溜め遺構は主として堅木材を水漬け保管するための用途であることが判明した。

吉田遺跡埋没河川出土の木製品



※図の遺物番号は実測図番号と対応

図 50 調査区北部木製品出土状況平面図



写真 106 調査区北壁サブレンチ木製品検出状況（北から）



写真 107 調査区北部木製品検出状況（北東から）

7. おわりに

図書館3号館調査区では、洪積台地と古期沖積面の境界部を西流する河川跡が検出された。河川は鎌倉時代中の完全埋没が推定されるが、埋土中には弥生時代以降の土器類を中心に、多量の遺物が包含されていた。遺物の由来地については、弥生時代以降安定的に集落が形成され続けた北側洪積台地であることは明白である。遺物中には、ほぼ完形に復元できる土器なども含まれていることから、高所からの自然流入ばかりでなく、台地上に暮らす人々が壊れた生活道具を河川に投棄していた姿を復元できる。

河川が機能していた末期には、右岸部に木器溜めが設けられた。木器溜めには主としてブナ科コナラ属アカガシ亜属の堅木材が保管されていた。その大きさから、家具や農工具に用いるための材と想定されるが、吉田遺跡における古代の板・角・棒材については、構内南東部において確認された埋設谷出土品では全85点中にアカガシ亜属は含まれず、ブナ科全体でもクリ3点、シイ属1点と極めて少数で、93%がヒノキ科で占められていた(横山2024)。近畿地方では、木製品の用材として弥生時代に大きな割合を占めたアカガシ亜属が古代に至ると減少することが指摘されており(黒須2019)、県内では古代から中世にかけての木製品樹種に関するまとまった報告例が少ないものの、室町時代の事例として、城館跡である中津居館跡ではスギが材の主体となっている(神崎・藤田2016、藤田2021)ことや、古代の事例として、長登銅山跡では製品ではあるがヒノキが主体註6となっている(池田ほか1993)ことなどから類推すると、山口県でも同様の変化が予想される。

ただし、参考としている県内での事例は官衙跡や城館跡であり、一般集落での用材状況を示すものではない。アカガシ亜属は温暖帯の照葉樹林を形成する主要木であることから、古代以降に人々の生活と断絶するとは考えがたい註7。また、上述した吉田遺跡の古代埋設谷にて行われた花粉分析でも「潜在自然植生であるシイ類、カシ類を主とする照葉樹林が今回の調査区周辺の広い範囲で残されていた」と示されている(野井2004)ことから、筆者は吉田遺跡における古代のヒノキ科材は遠隔地からの搬入である可能性が高いことを指摘した(横山2023)。

図書館3号館調査の木器溜め資料は、一部を除き未成品および材で構成されていることから、少なくとも鎌倉時代までアカガシ亜属が製品として利用されていたことを示す事例となる。また、材に大小が存在することは、複数種の木製品が製作される予定であったことを示している。浅学ではあるが、今後も同時期の木製品の存在に留意し、調査研究を進めたい。

【註】

- 1) 本邦におけるエリの文献上の初見は10世紀半ば、平安時代中期にさかのぼるとされる(内田1951)。
- 2) 板材474は459の下から出土しており、やはり長辺を北西-南東方向に向けていた。
- 3) 466~468は同一個体であるが、サブトレンチにて当資料を検出したのが10月9日(写真106)であり、以降アゼ除去後取り上げが行えたのが11月7日のことであった(写真107)。その間、濡れタオルで木製品の状態維持に努めたが、接合困難な状態にまで劣化が進行した。
- 4) 平成20(2008)年度に実施した動物医療センター改修Ⅱ期工事調査で検出した古代の埋設谷からも木鍾2点が出土しているが、樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属とツバキ科ツバキ属であった(横山2024)。
- 5) 同じく平成20年度調査で谷埋土から杭が7点出土しているが、ブナ科クリ属クリは1点であった。また、谷の左岸部に設けられていた護岸用の杭・矢板の樹種は、18本中9本がブナ科シイ属、2本がブナ科クリ属クリ、6本がバラ科サクラ属、1本がマツ科マツ属[二葉松類]であった(横山2024)。

6) 1例ではあるが大切ⅢC2Tからアカガシ亜属の鋳身が出土している。

7) 大内氏関連町並遺跡や下津令遺跡などでは、炭化物としてアカガシ亜属が一定の割合で出土している(パリオ・サーヴェイ株式会社2014・2017、(株)古環境研究所2017)ことから、室町時代に燃料として利用されていたことが分かる。

【文献】

池田喜文ほか(1993)『長登銅山跡Ⅱ』, 美東町教育委員会(編), 美祢(山口)

内田秀雄(1951)「魴(えり)の研究—琵琶湖生産地理研究—」, 人文地理学会(編)『人文地理』3巻4号, 京都

(株)古環境研究所(2017)「Ⅱ章 炭化物の樹種同定」, 山口市教育委員会(編)『大内氏関連町並遺跡10—第9・29次調査—』, 山口

河村吉行(1985)「中央図書館増築予定地M—16区の発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査年報Ⅱ』, 山口

河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』, 山口

神崎前・藤田慎一(2016)『中津居館跡Ⅱ』, 岩国市教育委員会(編), 岩国(山口)

黒須亜希子(2019)「近畿における木製品の用材選択」, 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(編)『京都市文化財保護課研究紀要』第2号, 京都

田畑直彦(2010)「教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口

野井英明(2004)「山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅥ・XⅦ』, 山口

パリオ・サーヴェイ株式会社(2014)「Ⅶ章 炭化物の樹種同定」, 山口市教育委員会(編)『大内氏関連町並遺跡8—第11・15・19・24次調査と金属生産関連遺物の自然科学的調査—』, 山口

パリオ・サーヴェイ株式会社(2017)「Ⅵ 自然科学分析」, (財)山口県埋蔵文化財センター・防府市教育委員会(編)『下津令遺跡4』, 山口

藤田慎一ほか(2021)『中津居館跡Ⅲ』, 岩国市教育委員会(編), 岩国(山口)

豆谷和之(1994)「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅡ』, 山口

横山成己(2016)「図書館改修工事及び環境整備(図書館周辺道路迂回)工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成24年度—』, 山口

横山成己(2018)「第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成25年度—』, 山口

横山成己(2019)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成26年度—』, 山口

横山成己・水久保祥子(2022)「福利厚生施設新営その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成26年度—』, 山口

横山成己(2023)「付篇1 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅰ)」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和元年度—』, 山口

横山成己(2024)「付篇1 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和2年度—』, 山口